

17	刈谷	刈谷市立刈谷南中学校	ヤマグチ ショウタロウ 氏名 山口 翔太郎
分科会番号	02	分科会名	外国語教育

研究題目

自信をもって英語で伝え合う生徒の育成
 ―英語科中学1年生「My Japanese Star to the World」の実践を通して―

1 主題設定の理由

第1学年32名に英語に関するアンケートを実施したところ、資料1のような結果が得られた。多くの生徒が、小学校で英語に慣れ親しんできていることから、英語の学習に前向きに取り組む生徒が多いことが分かった。Q2では3.01あり、積極的に会話することが

英語アンケート	平均値
Q1：英語の学習に興味がある。	3.15
Q2：自分から積極的に会話することができる。	3.01
Q3：自分から自信をもって会話を続けることができる。	2.58
Q4：相手からの質問に答えることができる。	2.51
Q5：相手が話したことに対して、疑問文で質問することができる。	2.15
学級の生徒32人にアンケートを実施。以下の4段階で回答 4・・・とてもそう思う 3・・・そう思う 2・・・少しそう思う 1・・・そう思わない	

資料1 英語アンケート結果

ができる生徒が多かった。しかし、Q3は2.58、Q4は2.51、Q5は2.15と、低い数値であった。回答の理由としては、「返答することはできるけど、そこから話を広げることがあまりできない」「会話ではすぐに自分の言いたいことをうまく伝えたり、相手の言っていることを理解したりすることができない」など、自分の英語表現に対する不安やコミュニケーション能力に対する自信のなさを感じている生徒が多かった。

現行の学習指導要領では、「自分の考えや気持ちを即興的に伝え合ったり、情報をまとめて発表したりする力」が必要とされており、学習指導要領の表記にあるように、「互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動の充実」「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が求められている。既習表現を活用し、自分の考えや思いを英語で表現する場を設定すれば、英語で表現する力を身に付け、自分の英語表現に自信をもつことができると考えた。また、他者に関わり合う中で、自分の英語表現を振り返る場を工夫し、自分の英語表現の高まりを実感できれば、自信をもって伝え合うことができるだろうと考えた。

以上のことを踏まえ、本研究の主題を「自信をもって英語を伝え合う生徒の育成」とし、研究を進めることとした。

2 研究の構想

(1) 目指す生徒像

- ① 自信をもって英語で自らの考えや思いを伝えようとする生徒
- ② 他者との関わり合いを通して、自己の英語表現を高め、自信をもって伝え合う生徒

(2) 研究の仮説と具体的な手だて

<仮説Ⅰ>

既習表現を活用し、自分の考えや思いを英語で表現する場の設定をすれば、英語で表現する力を身に付け、自分の英語表現に自信をもつことができるだろう。

<仮説Ⅰに対する具体的な手だて①>既習表現を活用し、表現する場の設定

教科書本文やワークシートの使用から、自分の伝えたい表現に近づけることができるように、既習表現を活用する場を設定する。また、既習表現を上手に活用できることのよさ

や、うまく表現できない内容を言い換えたりできる視点に気付けるようにする。さまざまな英語表現の中から自分の考えや思いに近い表現を選択できるようになることで、自分の考えや思いを英語で表現する力を身に付けることができるだろう。

＜仮説Ⅰに対する具体的な手だて②＞英語で表現する力を身に付ける場の工夫

A L Tやペア、グループでさまざまなテーマについて、即興的に会話を行う。あらかじめ準備したことを一方的に話すのではなく、相手の言葉に共感を示したり、話の流れに応じた質問をしたりする。また、単元を通して、言いたくても上手に伝えられなかった表現を振り返らせ、資料2のように教師がまとめたワークシートを作成した。生徒自身が必要だと感じている表現を練習する場を設定することで、表現する力を身に付けることができ、自信をもつことができるようになるだろう。

英 語	日 本 語
What food does she like? 〇	彼女はどの食べ物が好き? 〇
She likes ramen. 〇	ラーメンが好きです。 〇
What subjects does she teach? 〇	彼女はどの教科の先生ですか? 〇
She teaches Japanese. 〇	彼女は国語を教えます。 〇
Which do you like, sushi or ramen? 〇	寿司とラーメン、どちらが好きですか? 〇
I like sushi. 〇	私は寿司が好きです。 〇

資料2 「言いたかったけれど、言えなかった集」

＜仮説Ⅱ＞

他者と関わり合う中で、自分の英語表現を振り返る場を工夫し、自分の英語表現の高まりを実感できれば、自信をもって伝え合うことができるだろう。

＜仮説Ⅱに対する具体的な手だて③＞仲間と表現方法を振り返る場の工夫

本単元を通して、A L T・外国人からのフィードバックをもらう場や、タブレット端末を活用し、会話の様子を動画で振り返る場、会話記録から仲間と英語表現についてアドバイスし合う場を設ける。また、アドバイス活動を設定することで、客観的な視点で自身の英語表現を振り返ったり、新たな表現方法に気付いたりすることができるだろう。仲間と交流し、アドバイスをもらうことで、新たな表現に気付き、言いたいことが表現できることで、自分の英語表現の高まりを実感できるだろう。

＜仮説Ⅱに対する具体的な手だて④＞他者に英語で伝え合う場の設定

A L Tや初対面の他者と英語で伝え合う場の設定をする。また、本単元では二段階構成とし、一回目は馴染みのあるA L Tへの紹介、二回目は初対面の外国人との紹介の場とする。二度設定することで、生徒にとって「通じた」という成功体験を得ることができ、自信をもって伝え合おうとするだろう。また、習得した英語を活用する場を設定することで英語力を高めることにつながるだろう。

（３）抽出生徒（生徒A）の実態と期待する姿

生徒Aの英語力は、1年生全体の中では中位で、英語で話したり、書いたりすることを苦手としている。また、1学期の授業を通して、表現の不確かさや文法的誤りへの不安から、自信がなく、会話の途中で発話が途切れてしまう傾向にあることが分かった。今回の「My Japanese Star to the World」を通して、自分の考えや思いを仲間と協力して英語で表現したり、話したりする経験を通して、英語で伝えられたという喜びを感じ、「もっと英語で話せるようになりたい」という気持ちをもつことを期待したい。また、自信がもてない生徒Aの実態が、本単元により、英語表現の幅を広げ、他者との関わり合いを通して、自分の考えや英語表現がより深まることの価値に気付かせたい。

（４）単元構想表

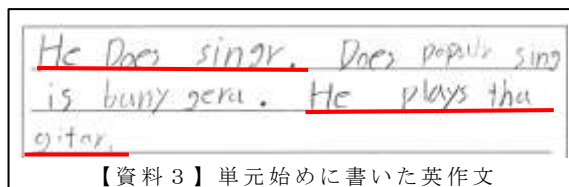
単元名：My Japanese Star to the World (13時間完了)		
時	生徒の学習内容	指導上の留意点
1	・初めて来日したA L Tからのビデオレターを見る。	・必要な表現や相手の求める視点に気付けるように、場面・状況を設定した海外の方からのビデオレターを提示する。
2 3	・代名詞や三単現の用法を理解する。	・代名詞の用法や三単現の理解を深めるために、動画やイラストを提示し、視覚的な工夫する。
4 5	・教科書やワークシートを参考に、人物紹介の英作文をする。	・自分の伝えたい表現に近付けることができるように、既習表現を活用する場を設定する。(手だて①)

6	・人物紹介の発表をする。	・人物紹介の発表練習を行う。
7 8 9	・教科書本文やワークシートを活用し、ペアで質問し合ったり、答えたりする練習を行う。	・表現する力を身に付け、自信をもつことができるように、生徒自身が必要だと感じている表現を練習する場を設定する。(手だて②)
10	・ALTと三人一組となり、「推しの魅力」を伝え合う。	・習得した英語を活用できるように、ALTに紹介する場を設定する。(手だて④)
11 12	・ALTからのフィードバック動画を閲覧し、次回に向けて修正する。	・自分の英語表現の高まりを実感できるように、仲間と交流し、アドバイスをもらい、新たな気づきを得る場を設定する。(手だて③)
13	・初めて出会う外国人と三人一組を編成し、「推しの魅力」を伝え合う。	・1回目の紹介よりも、習得した英語を活用し、他者に伝わったと実感できるように、初対面の外国人に紹介する場を設定する。(手だて④)

3 実践と考察

(1) 既習表現を活用し、自分の考えや思いを表現する生徒

初対面の外国人に「推しの魅力」を英語で伝え合うことを単元のゴールとし、「*My Japanese Star to the World*」を構想した。第4時では、教科書の本文を通して、どんな英語表現を活用すると自分の紹介したい人物を伝えられるかを考えるところから始めた。資料3は第1時に書いた生徒Aの紹介文である。資料3の赤い実線が示すように、何を書きたいかという内容面の意図は概ね明確にもっていることが分かる。しかし、三人称単数現在形や既習の基本的な語彙について文法的な理解の不十分さが顕著であった。その結果、生徒Aの考えが英語として十分に表現されず、伝えたい内容が相手に伝わらない状況が見受けられた。



【資料3】単元始めに書いた英作文

そこで、第5時では、伝えたい内容を最大限表現できるようにするために、資料4「既習表現を生かしたモデル文」を教師が作成し、生徒に紹介文を聞かせた。その後、教師からモデル文が書かれたワークシートを配付し、生徒たちに「自分の英作文に取り入れられそうだ」と思う箇所に線を引かせた。

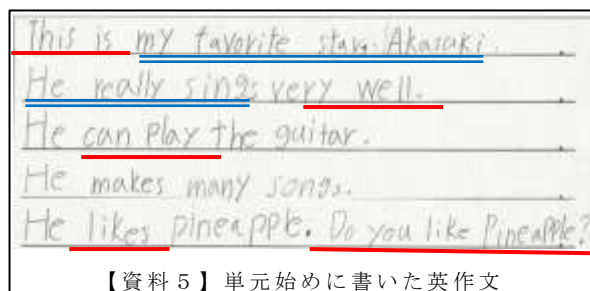
【資料4】既習表現を生かしたモデル文（下線部は生徒Aが注目した箇所）

This is my star. Taka. He lives in Kanagawa, Japan. He works as a famous singer. He really likes singing.

My favorite hero is Ichiro. Call him Ichiro. He was a baseball player. So he can play baseball very well.

生徒Aは、資料4の下線で示した箇所に線を引いた。教師の発表後、生徒Aはモデルスピーチについて聞き取れた内容を、周りの仲間と共有した。すると生徒Aは、「1学期に学習したcanが使えるそうだ」「紹介する人を伝える表現だけでこれだけある」と振り返り、既習表現を上手に活用することで、よりよい表現で伝えられることに気付くことができた。

生徒Aは好きな歌手についての内容を書こうとしていたが、2文書いたところで行き詰まっていた。仲間からたくさんのアドバイスをもらったり、モデル文を参考にしたりし、生徒Aは資料5のように英作文を完成させることができた。資料3での「He plays tha gitar」から資料5にあるように「He can play the guitar」のようにcanを用いることでより詳しい情報と



【資料5】単元始めに書いた英作文

なっていることから、既習表現を上手に活用できていることが分かる。自分の伝えたい表現に近付けることができるように、既習表現に気づき、活用する場を設定したことは、自分の考えや思いを英語で表現する力を身に付ける上で有効であった。

(2) 英語で表現する力を身に付け、自信をもって伝える生徒

第6時では、人物紹介の英作文を完成させた生徒たちに、ペアで発表練習に取り組ませた。話すことが苦手な生徒Aも、赤い実線で示した通り sings や guitar など、キーワードとなる語をジェスチャーで強調して話すことができた。しかし、発表後に質問をし合う場を設定したところ、生徒Aは思うように質問したり、返答できなかつたりした。そこで、第7時から、その場で相手に質問したり、応答したりする英語表現を身に付けるため、英語でやりとりする場「Karinan English Talk」(以後、KETと表記)を行うことにした。

まず、教科書の本文を提示し、即興で疑問文を考え、相手に伝える練習をした。Is she...? と Does she...? の文の構造に混乱する生徒もいたが、ペアで互いに教え合いながら懸命

に練習に励んだ。また、疑問詞を用いた疑問文を習熟させるために、何度も教科書本文について尋ねる疑問文を作る練習をした。資料6は生徒Aが実際に作った疑問文の例である。練習を重ねていく内に生徒Aは、「Yes

やNoだけではなく、いろいろな疑問文が言えるようになりたい」と口にした。そこで、生徒たちから言いたくてもうまく言えなかつた表現を振り返らせ、資料7「言いたかつたけれど、言えなかつた集」と名付けたワークシートを生徒に提示し、活用させた。生徒が必要としているということで、未習語を用いた文も取り入れた。このワークシートを使って、音読練習やペアワーク、語を入れ替えてのグループワークなど、さまざまなバリエーションで会話練習を継続させた。資料7の赤い実線に示すように「言いたかつたけれど、言えなかつた集」には、生徒Aが疑問に感じていた「あだ名は何ですか」という文に類似したものも含まれていた。生徒Aは「call と代名詞をうまく使えばいいんだ」と合点がいった様子であった。また、生徒Aは授業の振り返りとして資料8のように記した。

【資料6】教科書本文を用いて作った生徒Aの疑問文の例

- ・ He's twenty-four years old. → Is he twenty-four years old?
→ How old is he?
- ・ He works as a tour guide → Does he work as a tour guide?
→ What does he do?

30	Why do you like him? (Because) he is very cool.	どうして彼を好きなんですか? 彼はとてもかっこいいからです。
31	<u>How do you call him?</u> I call him "○○".	<u>あなたは彼をなんと呼びますか?</u> 私は○○と呼びます。

【資料7】「言いたかつたけれど、言えなかつた集」

【資料8 生徒Aの振り返り】

その場で質問をしたり、答えることは難しいけれど、仲間と何度も練習することや楽しくできれば、緊張せず、自信をもって取り組めることが分かった。①分からなかつた表現が分かるようになることで、自分の紹介文もより詳しくなつたり、質問することで相手のことを引き出すことにもなると思った。

「分からなかつた表現が分かるようになることで、自分の紹介文もより詳しくなつたり、質問することで相手のことを引き出すこと」と振り返った。KETの実施や「言いたかつたけれど、言えなかつた集」を用いた練習が、即興で応答することやYesやNo疑問文だけでなく、疑問文とその応答文の理解が英語表現の幅を広げることに影響を与えたと言える。生徒自身が必要だと感じている表現を練習する場を設定することは、表現する力を身に付ける上で有効であった。

(3) 仲間と表現方法について振り返る生徒

第11時では、始めに「My Japanese Star to the World」についてALTからのフィードバック動画を視聴した。自分の話している姿を見ることを恥ずかしがっていた生徒Aは、繰り返し動画を視聴するうちに、いろいろな気付きをペアの仲間と話し合うようになった。生徒Aは、「実際に見てみると声のボリュームが小さいな」「質問の種類が少なかつた」など、発話の様子や内容に目を向けていた。第12時には、生徒Aの困り感を解消するため、発話内容をより分析できるように、会話記録を文字に起こしたワークシートを生徒に配付した。すると、音声でははっきりしない箇所が見えることで、相手に伝わっていたかどうかについて、分析するペアも現れた。そして、第13時の「My Japanese Star to the World」

に向けてどうしたらよりよくなるか、仲間と意見を交わしていた。資料 9 はそのときの生徒 A のアドバイス活動の様子である。

【資料 9】

生徒 A のアドバイス活動の様子

生徒 A: What's? Who's your star

の方が正しく伝わりそう。

生徒 B: 何より誰のほうがいいね。こ

れなら、ALT に伝わるね。

生徒 A: マナは何の映画で有名なの、

何て言えばいいかな。

生徒 B: What is じゃない? 「言い

たかったけれど、言えな

かった集」を見てみよう。

【資料 10】第 10 時の会話記録の文字起こし（一部抜粋）から生徒 A が考えた英語表現（*は文法的誤りが見られる箇所）

生徒 A : Ok, *what's your star? → Who is your star?

生徒 B : This is my star, Ashida Mana.

Do you know her?

生徒 A : No, I don't. → Is she an actress?

生徒 B : I like her. She is Japanese actor.

She has a lot of movies and dramas.

→ What is her famous movie?

生徒 A : Yes, I do. Salli, *what's your star?

→ Who is your star?

また、授業のまとめに、生徒 A は授業の振り返りとして資料 11 のように記した。

【資料 11 生徒 A の振り返り】

ALT からの評価や自分の発表している動画を見て、声のボリュームや質問の偏りがあることに気付けた。アドバイスし合ったことで、疑問詞 who や what で質問や KET、言えなかった集を見る機会にもなった。アドバイスし合うことで、どう言えばよいのか分かるようになって英語が身に付いたと思った。

タブレット端末を使って動画を視聴したことで、自分の表現方法や会話の内容について気付くことができた。また、仲間とのアドバイス活動を通して、これまで学習してきた「言いたかったけれど、言えなかった集」を活用し、さらなる英語表現を考えることができた。資料 10 の青い二重下線部は、新たに仲間と考えた英語表現である。「Who's your star?」とより正確に相手に伝わる表現や be 動詞の疑問文を練習したことから、「Is she an actress?」と表現することができた。仲間と表現方法を振り返る場の工夫をしたことは、自分の英語表現の高まりを実感させる上で有効であった。

（４）初めて出会う外国人に再度英語で伝え合う生徒

第 12 時を経て、再度「My Japanese Star to the World」に取り組んだ。初めて出会う外国人に紹介する場を設定した。資料 12 に生徒 A のグループの会話記録を示す。4 分間、会話を続けた。

【資料 12】生徒 A のグループの会話記録

生徒 A : Ok, this is my star, Akasaki. Do you know him?

生徒 B : No.

生徒 A : Oh, really? Ah, he is Japanese singer song writer. He can sing very well. Call him Akasaki. He likes pineapple. Do you like pineapple?

(中 略)

生徒 A : He can play the guitar.

Can you play the guitar. 生徒 B and ALT?

Who is your star. 生徒 B ?

生徒 B : This is my star Ashida Mana.

She is very famous.

She has a lot of movies and drama.

・ 青い二重線部

→ 単元を通して、生徒 A が新たに加えた紹介内容

(中 略)

生徒 A : What Japanese food do you like?
A L T : I like wasabi.
生徒 A : Ah, ... One more time?
A L T : Wasabi.
生徒 A : Oh, you like wasabi! Wow.

・ **赤い実線部**

→ 疑問詞を使った疑問文で相手にたずねることができた箇所

・ 「言いたかったけど言えなかった集」や教科書本文の内容を質問する練習の成果

疑問詞を使った疑問文で相手にたずねることができた箇所を赤い実線で示した。1回目では、「Do you...?」「Can you...?」「疑問詞 what」の3種類の表現で留まっていたが、今回は「what の疑問文、相手の発言をリピートする文」の2種類を加えることができた。よって、文の種類も使う頻度も向上したと言える。これらは「言いたかったけど、言えなかった集」での会話練習を継続的行ったり、教科書本文の内容について質問する練習を重ねたりした成果であると考えられる。また、第5時に作成した資料5 (p. 3) の紹介文に加えて、表現できた箇所を青い二重下線で示した。生徒Aは授業の振り返りとして資料13のように記した。

【資料13 生徒Aの振り返り】

英語の経験が増えたのもそうだけれど、リモート先のA L Tが僕たちにいろいろな質問をしてくれたおかげで、話しやすかったと思った。逆にこちらからも質問することで、相手が話にのってくれて、話しやすくなったということもあった。A L Tの先生と話すことで、「通じるんだ」と表現できなかった英文が表現できるようになり、会話をするときには自信をもつことができた。

英語で話したり、書いたりすることが苦手だった生徒Aは、「A L Tの先生と話すことで、「通じるんだ」と表現できなかった英文が表現できるようになり、会話をするときには自信をもつことができた」と振り返っている。習得した英語を活用する場を設定することは、英語力を高める手だてとして、有効であったと言える。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 自信をもって英語で自らの考えや思いを伝えようとすることができた

教科書本文やワークシートの使用から、自分の伝えたい表現に近付けることができるように、既習表現を活用する場の設定や生徒自身が必要だと感じている表現を毎授業、練習する場を設定した。そうしたことで、自分の考えや思いを英語で表現する力を身に付けたり、伝えようとしたりすることができるようになった。

② 他者との関わり合いを通して、自己の英語表現を高め、自信をもって伝え合うことができた。

A L T・外国人からのフィードバックをもらう場やタブレット端末を活用し、会話の様子を動画で振り返る場、会話記録から仲間と英語表現についてアドバイスし合ったりするアドバイス活動を設定した。そうしたことで、客観的な視点で自身の英語表現を振り返ったり、新たな表現方法に気付いたりすることができた。

また本単元では、A L Tや初対面の他者と英語で伝え合う場を二度設定した。習得した英語を活用する場を設定したことで、自己の英語表現を高めたり、「通じた」という成功体験から、自信をもって伝え合ったりすることができるようになった。

(2) 今後の課題

即興でのやりとりをした際、「言いたいことが言えなかった」と振り返った生徒が多かった。「言いたいことが言えない」という体験から、その難しさに気付いた生徒に目を向け、彼らの気付きを新たな学びにつなげていきたい。より充実した会話ができるように、今後も手だてを研究していきたい。

以上のことを踏まえながら、引き続き本研究を続けていきたいと考える。